タイトル

『ゴージャスお宝鑑定家～「う～ん、ゴージャス！」15』

シーン1：剛田質店の日常（導入）

所要時間：約20分

【剛田質店の店内。眩いばかりの金色と真紅の装飾が目を引く内装。店の中心には、クリスタル製のカウンターが鎮座し、その上にゴージャスなティーセットが並んでいる。剛田は金縁ローブを羽織り、ソファに深く腰掛けている。白金はモップ片手に棚を掃除中。】

白金（棚を拭きながら独り言）

「ほんと、どうしてこんなに埃がたまるんだろう。ゴージャスとか言う割に掃除は全然しないし……。」

剛田（紅茶を一口すすり、優雅にため息をつく）

「白金君、埃すらもゴージャスの一部だと気づけないとは。美しいものには、時の刻印が付きものなのだよ。」

白金（振り返り、呆れた表情で）

「時の刻印じゃなくて、単なる掃除不足ですよ。店内の埃、ゴージャス以前に健康に悪いですから！」

剛田（笑みを浮かべて肩をすくめる）

「健康など些事だ。重要なのは、ここに訪れる人々が、美の世界に足を踏み入れる一瞬の感動だよ。」

白金

「その感動の前に、くしゃみが止まらないと思うんですけど。」

【その時、ドアがカラカラと音を立てて開く。派手なスーツ姿のお客様が登場。肩に風呂敷を担ぎ、満面の笑みを浮かべている。】

お客様（威勢よく）

「剛田さん！今日はすごいぞ！見つけたぞ、究極の逸品を！」

剛田（ゆったり立ち上がり、ローブをはためかせて）

「おお、それは楽しみだ。さあ、見せたまえ、君が見つけたゴージャスの化身を。」

白金（内心で）

「また変なもの持ってきたんだろうな……。」

シーン2：エメラルド製のヌンチャク登場

所要時間：約30分

【お客様が風呂敷を丁寧に広げる。中から現れたのは、見事なエメラルド製のヌンチャ

ク。その緑色の輝きが店内のライトを反射し、白金の目に直撃する。】

白金（眩しそうに目を細めて）

「……なんですかこれ!? ヌンチャク……ですよね？しかもエメラルドって……どういう発想なんですか!?」

剛田（目を輝かせて）

「う～ん、ゴージャス！見たまえ、白金君。この透明感。この滑らかな曲線。そして、この不思議な武骨さの中に漂う気品！」

白金（半分呆れながら）

「不思議どころか完全に危険な品ですよ！割れるの確定じゃないですか！」

お客様（得意げに）

「いやいや、見た目だけじゃないんだ。これ、実際に振り回せるんだぜ！」

【剛田が手袋を着け、慎重かつ優雅にヌンチャクを持ち上げる。その重さを感じながら、しばし目を閉じる。】

剛田（静かに語り始める）

「エメラルド……古来より、人々を魅了してきた緑の宝石。その石言葉は『愛』『希望』『再生』……。」

白金（警戒しつつ）

「剛田さん、また始まりましたよ。今回はどんなロマンを語るつもりですか？」

剛田（語りを止めることなく）

「黙りたまえ、白金君。この石は語りかけてくるのだ。その緑の輝きは、心を清め、未来への希望を灯す。かのクレオパトラも、この石を愛し、権力と美の象徴としたと言われている……。」

白金（困惑しつつ）
「いやいや、これはヌンチャクですよ？希望を灯す前に、自分が割れますって！」

剛田（無視して続ける）
「しかも、このエメラルドは単なる装飾ではない。武器としての荒々しさを内包しながらも、それを昇華して調和を生む。これぞ、究極のゴージャスだ！」

お客様（興奮気味に）
「そうなんですよ！わかりますか!? 剛田さん、このヌンチャク、実は戦士の魂を感じるでしょ？」

白金（呆れながら）
「戦士の魂どころか、割れたらただのガラスの破片ですよ……。」

【剛田はヌンチャクを両手で掲げ、店内のスポットライトに当てる。その光が反射して、壁に緑の輝きが踊る。】

剛田（感動しきった表情で）
「見たまえ、白金君。この光の反射が作る神秘的な影。これは愛と闘争の象徴であり、平和と混沌の融合だ！」

白金（完全に呆れて）
「闘争って……その前に振り回す人が病院送り確定ですよ！」

お客様（ますます興奮して）
「ほら、白金さん！剛田さんの言う通り、これはただの道具じゃない。アートだよ、アート！」

白金（頭を抱えながら）
「いやいや、剛田さんが褒めちぎると余計に怪しく聞こえるんですけど……。」

【剛田はヌンチャクをそっと台座に置き、紅茶を一口飲んで息を整える。再び、穏やかな声で語りかける。】

剛田

「この品がゴージャスかどうかは、決して見た目だけでは決まらない。これが歴史に何をもたらすのか……その可能性が重要なのだ。」

白金（あきらめたように）

「だからその可能性、割れる方向にしか行きませんって……。」

シーン3：エメラルドヌンチャクの実演

所要時間：約20分

【剛田は再びエメラルド製ヌンチャクを手に取り、しばし沈黙。まるで武士が刀を抜く前の心構えをしているような、神妙な面持ちだ。】

白金（不安そうに）

「剛田さん、まさか振り回すつもりじゃ……。ヌンチャクですよ？しかもエメラルド製！重さもあるし、割れるし、危険すぎますって！」

剛田（キラリと目を輝かせ）

「白金君、真のゴージャスは挑戦の中に宿るのだよ。私がこの一品の可能性を証明しよう！」

白金（顔を覆いながら）

「証明する前に救急車の準備をしておきます……。」

【剛田はヌンチャクを片手で持ち上げ、優雅な仕草で構えを取る。お客様は目を輝かせて見守り、白金は全力で止めようとするが、剛田は完全に聞く耳を持たない。】

剛田（大きく息を吸い込んで）

「見よ、白金君。このゴージャスな流麗さを！」

【剛田がヌンチャクを振り始める。最初は意外なほどスムーズな動きで、重厚感のある音が空気を切り裂く。】

お客様（大興奮）

「すごい！さすが剛田さん！見事なフォーム！」

白金（震える声で）

「これ、絶対に途中で何か壊れますよ……！」

【剛田はさらにテンションを上げ、ヌンチャクの回転速度を上げていく。しかし、突然「ゴッッ！」という鈍い音が響く。剛田の表情が微妙に歪む。】

剛田（やせ我慢しながら）

「う……む、ゴージャス……だ……。」

白金（駆け寄りながら）

「剛田さん！肋骨いきましたねこれ！完全にやっちゃいましたね！」

剛田（額に汗を浮かべながらも優雅に微笑む）

「白金君、これはただの……少々の衝撃だ。優雅なる者は、痛みにも動じないのだよ。」

白金（呆れながら）

「動じてないふりしてますけど、顔が痛みに歪んでますよ！救急車呼びます！」

お客様（驚きながらも拍手）

「剛田さん、男気ありますね！これぞ真の芸術家魂！」

白金（振り返って）

「いや、ただの無茶です！何が芸術家魂ですか！」

【剛田はヌンチャクを台座に戻し、何事もなかったかのように紅茶を一口飲むが、手が微かに震えている。】

剛田

「この一品の真価が分かっただろう、白金君。

私が身をもって証明した。このヌンチャクは……ゴージャスだ。」

白金（半ば呆れつつ）

「いや、剛田さんの骨がゴージャスになっただけですよ！」

剛田（微笑みながら）

「いいかね、白金君。ゴージャスたるもの、常にリスクを超えて輝くものなのだ。」

白金

「そのリスク、剛田さんの体だけが背負ってますから！次は絶対やめてくださいね！」

【剛田は胸を押さえながらも、椅子に優雅に腰掛けて再び紅茶を飲む。白金は呆れつつも剛田の強情さに少し感心した様子で、一歩引いて座る。】

シーン4：価格交渉と真価の探求

所要時間：約20分

【剛田はエメラルド製ヌンチャクを台座にそっと置き、肋骨の痛みをこらえながら再び紅茶を一口飲む。その優雅な仕草を見て、お客様は感動しきった表情だが、白金は深くため息をついている。】

白金

「さあ剛田さん、これで実演も済みましたし、肋骨もやっちゃいましたし……次は価格の話をしましょうか。」

剛田（目を閉じ、神妙に）

「価格とは……品物の価値を数値化する行為。真にゴージャスな品には、その価値を計ることなど、本来できぬものだ。」

白金（苦笑しながら）

「でも剛田さん、それが質店の仕事なんです。お客様だって売りたいから持ち込んでるわけで。」

お客様（期待を込めた表情で）

「そうそう、これどのくらいになりますかね？元手、結構かかってるんですよ。」

剛田（エメラルドヌンチャクを眺めながら）

「ふむ、製作に相当な手間がかかっただろう。この透明感、細かな細工、そして緑の濃淡……。だが、それ以上に大切なのは、この品が放つ“物語”だ。」

白金（皮肉交じりに）

「“物語”も大事ですけど、現実的な値段が一番大事ですよね。」

剛田（軽く手を上げて静止する仕草）

「白金君、焦るな。私はただの鑑定士ではない。ゴージャスを見抜く目を持つ者だ。この品の真価を見極めるには時間が必要だ。」

お客様（不安そうに）

「え、あの……値段は大体どれくらいに？」

剛田（胸を張って）

「500万！」

【その瞬間、白金の目が点になり、唖然とする。】

白金

「500万!? 剛田さん、そんな値段つけたらウチ潰れますよ！」

剛田（優雅に微笑んで）

「白金君、ゴージャスは数字に縛られるものではない。」

白金（慌てて計算機を叩きながら）

「ちょっと待ってください！エメラルドの素材代だけならまだしも、このヌンチャク、技術的な価値や市場価値を考えると……いや、せいぜい30万が妥当ですよ！」

お客様（ややがっかりした表情）

「30万……。うーん、やっぱりそんなもんかなあ。」

剛田（紅茶を置いて立ち上がり、神妙に語り始める）

「待ちたまえ。30万は“ゴージャスな価格”ではない。だが、500万は……おそらく非現実的だ。ゆえに、間を取って――。」

白金（驚愕して）

「間を取るって、まさか……！」

剛田

「400万！」

【白金が思わず頭を抱える。一方でお客様は歓喜の表情。】

お客様

「さすが剛田さん！話が分かる！」

白金（必死に反論）

「いやいや、剛田さん！絶対ダメです！赤字どころの話じゃなくなります！」

剛田（微笑みながら、白金に肩をポンと叩いて）

「白金君、真にゴージャスたる者は、小さな損失に動じないものだ。」

白金（涙目で）

「剛田さん、損失ってレベルじゃないですから！もう店が飛びます！」

【剛田は悠然とお客様に契約書を差し出し、優雅にサインを求める。一方、白金はその横で地団駄を踏んでいる。】

剛田（最後に微笑みながら）

「これでまた、我が店に一つ、輝かしき伝説が加わる……う～ん、ゴージャス！」

白金（疲れ果てた表情で）

「その伝説、後で笑えない話になりませんように……。」

エピローグ

所要時間：約 10 分

【後日、剛田がヌンチャクを店のショーケースに飾る。その輝きに見惚れるお客たちが集まり、剛田は誇らしげだが、白金はその度に店の財務状況を気にして深いため息をついている。】

白金（小声で）

「剛田さん……これ売れなかったらどうするんですか……。」

剛田（自信たっぷりに）

「売れるか否かではない。私が価値を見出した。それがすべてだ。」

白金（呆れ顔で）

「それが全部の理由にならないんですよね……。」

【店内はヌンチャクの輝きに包まれつつも、どこかバタバタした空気のまま幕を閉じる。】